opusdei.org

黙想の祈り:年間第 21主日(B年)

黙想のテーマ:「愛の叙事詩的な歴史」「虜ではなく自由な思い出」「種々の掟への愛|

愛の叙事詩的な歴史

虜ではなく自由な思い出

種々の掟への愛

主の説教が、いつも聴衆に快く受け 入れられたわけではありません。そ

の明確な例が、いのちのパンについ ての話の後に起こったことです。そ の時まで師について来ていた幾人か の人が、コメントしています。「実 にひどい話だ。だれが、こんな話を 聞いていられようか | (ヨハネ6・ 60)。この世における価値高い種々の プロジェクトには、何らかの放棄を 伴います。例えば結婚は、生涯に 亘って愛を紡いでいくよう招きます が、このことも勘定に入っていま す。第二朗読では、そのことを示唆 して、「それゆえ、人は父と母を離 れてその妻と結ばれ、二人は一体と なる」(エフェソ5・31)と強調してい ます。もちろん、他者に合わせて踊 りを習うことは、その人のやり方に 任せることを意味します。しかし、 それは自分自身のやり方で獲得でき るもの以上に素晴らしいものを実現 します。

キリスト信者の生活における放棄 は、単に放棄することを求めるので

はありません。確かに、愛の生活を 望む時、これは避け得ない事です。 聖パウロが言うように、天上の善を 望むには、地上のものと距離をとる ことが必要です(コロサイ3・1-2参 照)。しかしながら、歴史を叙事詩的 に語る話が反響を得るのは、断念し た事柄によるのではなく、獲得した 善によるものです。時々、神との関 わりが、厳しさに彩られているよう に感じることがあり得ます。それと いうのも、神の種々の掟を守るのが 非常に難しい場合に遭遇する時があ るからです。しかし、キリスト信者 の生活はそれだけに留まるものでは ありません。何よりも、私たちが熱 望し、主が私たちに与えようと望ん でおられる天上の善のために戦って いるのです。この善のいくつかは、 ただ永遠のいのちにおいてだけ味わ うのではなく、地上においてもそれ を味わい始めることができるので す。聖ホセマリアは言います。「本 当に愛するには、信仰と希望と愛徳

にしっかり根ざした心をもち、たく ましく、忠誠でなければなりませ ん。中身のない軽薄な態度だけが、 軽々しく愛の対象を変えてしまいま す。しかもそのような愛は愛とは言 えず、自分のことしか考えない埋め 合わせにすぎないのです。愛のある ところには、委託・犠牲・努力・自 己放棄を辞さぬ堅固さもあります。 そして委託と犠牲と自己放棄の生活 をしていれば、困難にさいなまれて も、幸せとよろこびを得ることがで きます。しかもそのよろこびが取り 去られることは決してないのです|

今日の第一朗読で、ヨシュアは、イスラエルの全部族を集め、根本的な決断をするよう招きます。「もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいるあなたたちの先祖が

 $[1]_{o}$

仕えていた神々でも、あるいは今、 あなたたちが住んでいる土地のアモ リ人の神々でも、什えたいと思うも のを、今日、自分で選びなさい。た だし、わたしとわたしの家は主に仕 えます | (ヨシュア記24・15)。実に、 ヨシュアのこの勧めは、アブラハム から思い起こして、イスラエルの民 が体験した全ての栄枯盛衰と、神が 各状況において、民を敵から守り、 豊かな祝福を与え、いかに忠実で あったかを語る感動的な話の結論で す(ヨシュア記24・1-14参照)。忠実で 民を守る神の記憶に呼び覚まされ て、民が決意を叫ぶのも不思議では ありません。「主を捨てて、他の 神々に仕えることなど、するはずが ありません。わたしたちとわたした ちの先祖を、奴隷にされていたエジ プトの国から導き上り、わたしたち の目の前で数々の大きな奇跡を行 い、わたしたちの行く先々で、また わたしたちが通って来たすべての民

の中で、わたしたちを守って下さった方です」(ヨシュア記24·16-17)。

ヨシュアは、神から頂いた数々の賜 を民に思い出させます。イスラエル の民には、度々、神がしてくださっ た全てのことを振り返ることが必要 でした。それは、移動中の種々の困 難を前にして、奴隷時代の気楽さ を、イスラエルの民はよく懐かし がったからでした。「誰か肉を食べ させてくれないものか。エジプトで は魚をただで食べていたし、きゅう りやメロン、葱や玉葱やにんにくが 忘れられない。今では、わたしたち の唾は干上がり、どこを見回しても マナばかりで、何もない」(民数記 11・4-6)。「主がお与えになる食物 は、その他のものとは全く違い、こ の世で供されるある種の食べ物ほ ど、味覚を満足させることはないか もしれません。すると、私たちは砂 漠でのユダヤ人たちのように他の食 べ物を懐かしみます。彼らはエジプ トで食べた肉や玉葱を懐かしみましたが、それを食したのは奴隷の食卓であった事を忘れていました。彼らはいざないの時、回想しましたが、それは病的な回想、部分的な回想でした。それは奴隷的な思い出で、自由なものではありませんでした」
[2]。

主から自由を与えられ、守護者とし て主の力強さを経験した民が、奴隷 時代の外面的な安楽さを懐かしみま す。矛盾していると思えますが、イ スラエルの体験は、私たち一人ひと りも経験し得ることです。神に出会 いながら、神から引き離してしまう 偽りの穏やかさを懐かしんで、信仰 生活を複雑な何かのように考えるこ とがあり得ます。そんな時には、ヨ シュアのように、主がご自分の現 存、種々の秘跡、周りに置いてくだ さった人々を通して、私たちにお与 えくださった全ての善を思い浮かべ ることです。そして、私たちが拒絶 しない限り決して離れず近くにいてくださる、優しく万事を整えてなるをを記しているとかないとを思い出し、私とがないことを思い出しることがないことを思い出したがないというに言いたがしたがあるといる。あなたこそ神の聖者であるといったしたちは信じ、また知ってもしたちは信じ、また知っている・68-69)。

「主なる神よ、移り変わる世界の中にあって、わたしたちが心を一つにして愛の掟を守り、いつもまことう 喜びに生きることができますよう に」 ③。この日曜の集会祈願はこう 祈ります。この嘆願を通して、教会が私たちを招くのは、単に神の掟を 守るということだけでなく、神の 欠に応えるようにということです。外

部から課された事を果たすことは、 それが正当なものであり、私たちと 社会の善に寄与することであるな ら、称賛される振る舞いになり得ま す。しかし、私たちはより高みを目 指します。善なる方であり、私たち に相応しいことだけを頼まれる神を 愛することを望んでいます。

愛するには、神が聖書、聖伝と教会 の教導職を通して提案されることの 背後にある、善の理由を知ることが 求められます。この理解は抽象的な ものではなく、ある具体的な掟や示 唆の意味する善を信仰の助けによっ て理解するということです。私たち は、神の掟を、権威ある人によって 送られたものだからというだけで果 たすのではありません。それが善を 伴っていることを理解しているか ら、あるいは少なくとも、そうする よう私たちに望んでいる方を信頼し ているからです。信仰の光と恩恵に 助けられて、種々の掟が持ってい

る、私たちのための善を見つけ出す ことができます。そうすると、あの を与ななできます。「御身の欲する、 ものを与えたまえ」 個身の欲すること を命じたまえ」 ですから、 とをが神の掟の意味をよができる たちが神の掟の意味をよができる たちがらそれを愛することができる に、 う。

こういう意味で、祈り、霊的読書とこういう意味で、祈り、霊的問件は、キリスト信者に頂きけての知恵を授けてもいったの通常の手段になり愛の生活のでは、私もないでは、ないままが見いるでは、では、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、はいいのでは、はいいのでは、

作者が言っています。「味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は」(詩編34・9)。御子が私たちのために成し遂げられた全てのことを感謝し、味わうことが出来るよう、聖マリアに助けをお願いしましょう。

[1] 聖ホセマリア『知識の香』75番

[2] フランシスコ、2014年6月19日説 教。

[3] ローマミサ典書、年間第21主日の集会祈願。

[4] 聖アウグスティヌス「告白」第 10巻、29章。 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-nenkann-21shujitu-b/(2025/12/16)